
海江田さんのこと

森永 留

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海江田さんのこと

【Nコード】

N9873K

【作者名】

森永 留

【あらすじ】

1980年代の終わりから1990年代にかけて、美しく咲いていたサンシャインパークの桜並木。そこで知り合った海江田さんのこと。記憶の断片とレクイエム。

桜のきれいな道だった。

立川駅北口から、汗ばむぐらいの足取りで歩けば、十五分ぐらいの場所だった。今は無機質すぎるモノレールが、宙を行くように「立飛」駅まで運んでくれる。

*

海江田さんにはじめて会ったのは、僕がまだ三十代になったばかりのころで、広い立川飛行場跡地の二画にある「ルーデンステニスクラブ」のロビーあたりだったのだと思う。一帯は「サンシャインパーク」と呼ばれていて、テニスコート、住宅展示場や車の展示販売場、あるいはゴルフ練習場を訪れる人で休日にはぎやかだった。しばらく後にはパターゴルフのコースやゲームセンターなどができたり壊されたりしていた。

本当は最初にそれらのどの場所で海江田さんに会ったのかは覚えていない。すべての場所にいた海江田さんを見かけたようにも思う。海江田さんはいつもにかんだような笑顔であいさつを返してくれた。年中日焼けをしているような印象があつて、そして時々は何だかとても困ったような顔をして歩いているときもあつた。

一九八〇年代の終わりから一九九〇年代のはじめまで、短いあいだではあつたけれど、僕は、毎年美しく咲く桜並木を歩いた。そして海江田さんは、もっとずっと長くその桜を見てきたのだった。

*

僕の子ども達は、六歳と五歳と生まれたばかりの赤ん坊だった。京都で暮らす彼らと、そして妻と離れて、僕はルーデンステニスクラ

ブの建物の一隅で出版の仕事に就いていた。どうしてそこが編集室になったのかは、不思議な人のつながりだったとしか言いようがない。それまで虎ノ門のマンションを仕事場に使っていたスタッフは、立川に事務所を移すことには大反対で、次の日にも辞めそうなことを言ったものだった。

今にして思えば、三十歳そこそこの人間が創業したばかりの小さな編集プロダクションにある「自由」さは、ルーデンステニスクラブの解放的でどこか未開発な明るさに合っていたのだと思う。結局誰も辞めることはなく、僕たちの仕事は続いた。

ルーデンステニスクラブは、大きな樹のそばに受付ロビーと「レストラン・オーキ」の棟あり、メインのテニスコートをはさんだ反対側にテレビを置いた広いロビーのある宿泊棟があった。僕たちとはときどき昼食をオーキでとり、宿泊客のいないときにはよくロビーのテレビを見た。徹夜になるスタッフや、関西から呼んだスタッフのために、空いている宿泊室を二部屋ほど自由に使わせてもらった。帰国子女のチカちゃんは淡路島で拾ったマリコという名の猫を連れてきて、半月ほど宿泊棟に住み込んでいた。

*

海江田さんは猫のことを知っていたのだろうか。

宿泊棟で猫を飼っていると知っても、海江田さんは怒らなかつただろうな、と思う。しょうがない人たちだな、という笑い顔をして「コーチやお客さんには飼い猫とわからないようにね」とか言ってくれたはずだ。でも背中を向けて彼ひとりになったときには、とても困った顔をして歩いていたかもしれない。

実際のところ、チカちゃんとマリコが半月近く住んだ部屋はひどいことになってしまって、その後彼女たちの暮らした部屋にテニスのお客が泊まることは一度としてなかった。そのことで芝公園にあった海江田さんの所属する会社、つまり僕たちの大家からも、テニス

スクラブのコーチやスタッフからも一言も怒られた覚えがない。誰かほかの人がものすごく怒られて謝ったか、みんながどうでもいいことだと考えたのか、もしくは海江田さんが上手にとりなしてくれたからなのだと思う。

宿泊棟になっていた建物は朝鮮戦争当時に米軍の負傷兵の収容施設だった、という説があった。一度その真偽のほどを海江田さんに聞かなくては、と考えたりしたものだったが、そんな背景もあって恐い話や不思議な話がけっこう噂されていた。

二階で外国人がパーティをされていて眠れなかったとか（宿泊棟には断じて二階はなかった）、夜中に廊下から外国語が聞こえたとか、泊まった人が必ず金縛りにあう部屋があるとか。そういうオカルトな噂だけではなく、工事中に床下から銃弾が山ほど見つかったとかいう話もあった。テニスクラブのコーチたちも若かったし、お客さんの大半が学生の合宿のようなメンバーだったので、安酒を飲んで騒いで、そういう奇妙な話が面白おかしく語り継がれたのだろう。

*

海江田さんとは酒を飲んだ記憶がない。立川にいた頃はあまり人と酒を飲んだ覚えがない。仕事が忙しいときには、事務所のサマーベツドで撮影に使っていらなくなったウエディングドレスを被って寝ていたし、とても暇なときには高松町商店街の「ラッキー」でパチンコをしたり、ゲームセンターの将棋のゲーム機で名人と対戦していた。

仕事には毎日のように些細な変化があったし、紆余曲折を重ねていたけれど、プライベートは淡々としたものだった。妻や子ども達と離れていて寂しいという思いもなかったし、金がなくても苦しいとは感じなかった。誰かほかの人たち、妻や子どもやスタッフが、僕の分までそう感じていたのかもしれない。

*

チカちゃんが少し長い海外取材に行っている間に、マリコが妊娠した。チカちゃんはずでに阿佐ヶ谷のアパートに住むことにして引越しも済ませていたけれど、マリコは立川に居残っていたのだ。

子猫は五匹生まれた。もらってくれる人がいることを期待したけれど、引き取り手は現れなかった。白茶の一匹を僕のアパートに置き、残りの四匹を保健所に連れて行った。今にして思うと、その十日ほどのあいだ、僕は仕事以外ではずっとマリコの子猫に手を焼いていたことになる。たぶん子猫のことでは海江田さんにも話をしたはずだ。「猫をもらってください」という写真入の張り紙を、ロビ―に掲示したりした。誰かの了解を得た覚えも、誰かに怒られた覚えもない。どうやら僕は、肝心なときほど勝手気ままで常識知らずになれる生き方を、その頃から着実にひとつの才能として発揮しはじめていたようだった。

*

類は友を呼ぶ、とはよく言ったもので、ある意味変わり者の集団と認めざるを得ないメンバーで、大手新聞社のブライダル雑誌のプロデュースと、その編集制作実務を中心に僕たちの仕事は続いた。僕は原稿の入稿や校正のために毎日のように立川から築地まで往復した。テニスクラブを闊歩する学生たちと同じような、ウインドブレーカーにジーンズで新聞社のエレベータに乗り出版局内に入りました。仕事で街へ出るときとサンシャインパークにいるときと違うことは、素足にサンダル履きでないことだけだった。

海江田さんにもなぜだかサンダル履きのイメージがある。学校の教師や病院の医局の人達のように、サンダル履きで仕事をする人、という印象があるのだ。気取らない、気取る必要もない生き方。海江田さんにはいつもそんな雰囲気があった。淡々とはしていても、

しかしそれは決して人に対する冷たさではなく、むしろシンプルなやさしさと実直さが伝わってくる生き方だった。

実は僕もそんなふうに生きたいと思っていたし、今もそう思っている。

*

しばらくして、チカちゃんがニューヨークのビジュアルアーツに留学することになり退職した。猫のマリコはその少し前に行方がわからなくなっていた。マリコの子どもの白茶のヨタロウは、「社宅」である僕のアパートと近所の別のアパートの住人のところで二重生活をしていた。時折アパートの近くでその姿を見だし、夜遅くにコンビニの袋をぶら下げて歩いていると、どこからともなく現れていっしょに部屋まで帰ってきたりもした。冬の間でも僕は部屋にいるときにはいつもドアを開けていた。

桜の季節がすぐそこまできている、冷たい雨の降る夜、しばらく僕の部屋から姿を消していたヨタロウが姿を見せた。なんだか急にやせたように見え、心もとないうめをひとつ残してすぐに部屋から出て行った。

しばらくして何かを銜えて戻ってきて、僕のベッドの足元のほうにそれを下ろし、またすぐに出て行った。ヨタロウが銜えてきたのは、まだ目の開かない子猫だった。それは五回繰り返された。二重生活先で良いものを食べさせてもらっているせいで太ったのだと思っていたのだが、ヨタロウは妊娠していたのだ。つまりヨタロウは雌だった。

いつかこの話をチカちゃんにする日があるかと思っていたが、今もその機会はなく、ずいぶんの時が過ぎてしまった。

そして海江田さんの訃報は、二〇〇五年の桜の季節まであと少しの頃に、あまりにも突然に届いた。

*

一九九七年の春から、ルーデンステニスクラブの一画、ちょうどレストランとメインロビーと大きな樹のあった辺りを中心に、新しい結婚式場ができていた。その結婚式場は僕たちの会社も無関係ではなかったし、海江田さんの会社も無関係ではなかった。

海江田さんは、結婚式場を運営する会社（それは、つまり「今現在」僕が所属する会社なのだけれど）から借地代を受け取る側の会社の社長になっていた。僕たちの編集出版の仕事はミレニアムの年にするで一時代を終え、事務所は有明の臨海地区に移転して遠くなっていたけれど、その結婚式場の広告用の撮影などの仕事で立川へ行く時、時々昔のままの海江田さんの笑顔に会うことができた。

海江田さんが入院したことは一度人づてに聞いていた。あまり性質のよくない病気であることも知らされていた。それでも無事に退院して仕事に復帰したということだったので、また会えると思っていた。

*

三月になった東京は、もう暖かで穏やかな季節が近づいていることを実感させた。自宅の調布からどの路線で行くか悩んだ末に、分倍河原から南武線に乗り、途中の谷保か西国立あたりからタクシーを使うことにして京王線に乗った。

小さな狭い葬祭場だった。葬祭場の受付には知った顔もあり、僕は少し遅めに着いたにもかかわらず、前列の空席を勧められた。葬祭場はどこにでもありそうなレンタルスペースを、一般市民のための葬儀場にしてみました、という感じだった。それはそれで海江田さんらしくもあった。海江田さんらしさはあっても海江田さんはいない、ということ僕はあらためて思った。本来ならこんな前列に座るはずではなかったというのを思い、海江田さんの遺影を見つ

め、彼がここに招いてくれたことにしようと思った。
親族の席では、まだ若い子息の膝に、可愛い盛りの海江田さんの孫娘の姿があった。夫人の悲しみと疲れの重さが、喪服の肩先から十分すぎるほどに伝わってきた。
それでも、きつと、海江田さんは幸せだったのだ。

*

焼香を済ませ、受付の知った顔に挨拶をし、僕はそのまま急ぐように葬祭場を後にした。国立駅への下り坂を歩きながら、青空を見上げたとき、胸がつまって泣きそうになった。泣くことも泣きそうになることも、ここしばらくなかったことを僕は思った。小さく涙をすすって、携帯電話を取り出した。

諸行無常ですね、と電話の向こうで彼女は言った。それから僕は、国立駅のホームで電車を待つ間に、チカちゃんや猫のことを少し考えた。そして、いつもと変わらない、変わらないように見える、街の光景の中に戻った。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9873k/>

海江田さんのこと

2011年1月13日04時12分発行